
の親が殺し屋でした。」が「学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD」の世界だったら

nanaKURA10

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IF もし「自分の親が殺し屋でした。」が「学園黙示録 H I G H S C H O O L O F T H E D E A D」の世界だったら

【Nコード】

N4249M

【作者名】

nanaKURA10

【あらすじ】

「自分の親が殺し屋でした。」の世界の6年後の話。18になり以前より成長したイブが、ミッションの帰り、ヘリの中からとある町で 奴ら を見てしまった。

現在、修正を入れています。1話完了

本編のURL

k
/
h
t
t
p
:
/
/
n
c
c
o
d
e
.
s
y
o
s
e
t
u
.
c
o
m
/
n
5
0
0
1
0

【0人目】読む前に

もし「自分の親が殺し屋でした。」が「学園黙示録 HIGH SC HOOL OF THE DEAD」の世界だったらという、作品です。本編の「自分の親が殺し屋でした。」の内容を考えてる途中です。決まり次第そちらも書きます。

設定

「自分の親が殺し屋でした。」の世界の6年後の話。18になり以前より成長したイブが、ミッションの帰り、ヘリの中からとある町で 奴ら を見てしまった。

名前【^{イブ}歩姫】

年齢【18歳】

性別【女】

容姿【黒髪で長さは腰くらい。カッコイイ系の顔立ち】

身長【176cm】

能力 射撃SS

精密射撃SS

筋力SS

視力SS

潜入・変装SS+

勘 SS+

洞察力SS+

趣味【ミリタリー】

在住先【日本】

その他・備考

6カ国の言語を完全マスター（日本・中国・ロシア・英語・スペイン・フランス）

漢検1級

英検1級

柔道・剣道・中国武術・CQCなど武道などはほぼ習得済み

愛用の銃 ガバメントカスタム（ハルにもらったもの。）

【1人目】屋上の生存者

今回のミッションは簡単のものだった。

内容は某国の洋上研究所からある薬品を手に入れるというもの。

後は、家に帰りこれを2日後ホワイトハウスにもっていくだけのはずだった

私は、まさかこんな事態になるとは予測しなかった

20分程前

私は、今は輸送機に乗って家に向かっている。早い話があまり割に合わないボランテニアのような額で引き受けたミッションの帰り。

輸送機といってもガンシップに近く、銃器もつんでいるところのものとは違う輸送機だ。この機体の原型はC-130 ハーキュリーズ輸送機という。

暫く前に、手に入れ 家のものがチューニングしたもの。我が家で実用的にしたのではばAC-130だ。M102 105mm榴弾砲やM134バルカン、EMP処置その他...etc

下手すると米軍の本物のAC-130より性能がいいかもしれない。

降下用ハッチからの外を眺めていた。

雰囲気は普通の町のようにだったが、見てみると恐ろしい光景が広がった。

「なっ!? こ．．．れは?」

人が人を食べ、人を襲っているのだ。襲われたものも、大量の出血もしているにもかかわらず動き回っているのだ。

私は、その光景を数分間ボーッと見ていてしまった。私は、この機に積んでいる銃器・装備類がある所へ向かった。準備する片手間に、屋敷にいるハルと無線で連絡をとった。

「ハル! そっちは大丈夫か!？」

『マスター! はいっ 負傷者はいません。その様子ですとマスターもごらん』

「ああ、人を食ってやがる。あれは、まるでゾンビだ。」

『ゾンビですか．．．、あなたが間違っではいませんか。今 屋敷のほうは敷地内には 奴ら を入れていません。ですが総動員でやってもぎりぎり耐えているのがやっとです。』

潜入班の報告によれば、ウイルスによる生物災害【バイオハザード】だそうです。感染経路は詳しくはわかりませんが、恐らくは血液感染かと．．．引つかかれたり、噛みつかれたりするとアウトです。そ

のため鼠算式に増えていきます。特徴は、痛覚・視覚等が低下するようですが、そのかわり腕力が強く、マスターの腕力でやっとなにかできる位です。脳を破壊するか神経をだめにさせるしか対策は無いようです。』

「ありがとう、大体のことはわかった。私は、生存者の救出したいのだがいいか？」

『・・・』

「・・・」

『・・・はあ、わかりました。まったくマスターは昔から変わりませんね』

「ああ、無線は持っていく。周波数はいつものを使う。予定としては、生存者の発見救出後、家に向かう。可能な限り回収するつもりだ。そうそう、死ぬなよ」

『ふふ、マスターあなたもです。死ぬことの無いようにお願いしますよ、でも定期的には無線ください』

「わかった、何かわかり次第コールしてくれ。武器装備はいつものを使う。」

『ええ、わかりました。では大統領に使用許可とっておきます』

『頑張りましょう』

「互いにな」

そうして通信を終了した。

装備は一応重装備だ。

幸い、前回の任務のときは弾などなにもつかわないで終わったのでよかった。

装備は、ドラムマガジンを付けたM4カービンにM203グレネードランチャーのカスタムがされている物にMk23のサブレッサー仕様を1丁ずつ。

そうそう、ハルから受け取ったお守り代わりのガバメントカスタムも忘れずにつと。

予備のマガジンを複数ベストに入れ、背中に無線をセットし、ヘッドセットを耳に付け暗視ゴーグルの付いたヘルメットを入れる。

そのほか、現地で使えそうなものを詰め込んだGOバッグを背負う。

まあ、このくらいあればいいだろう。

貨物室にあった電話で操縦席にいるユイに連絡を入れる。

「ユイ、私だ。そこから見える範囲にある高い建物によせてくれ」
『了解しました〜、ここでいいですか？』

貨物室の外へのドアをあけ確認した。

ユイが提示した場所はどこかの学校の屋上だった。

「！っユイツ！屋上へ向かって、ここでバルカン砲を回して！」

『了解しました〜』

そこは、一般の学生と思われる3人が大量の感染者と戦っていた。ユイは正確に感染者のみをバルカン砲でミンチにした。

女生徒が槍のようなもので戦っていたが押さえつけられて 倒れてしまった。

私はすぐさま感染者に対し、M4でヘッドショットを撃って、ロープで地上に降下した。

「ユイ、校庭にいる感染者に1発くれてやれ、その後屋敷に戻って隊を再編し来てくれ」

『わかりました〜』

ユイに無線で指示を出した後、少女にかけよった。

「大丈夫か？」

少女はなんだかわからないような顔をしていた。

（まあ、しょうがないか・・・）

「はい、助かりました。ありがとうございます。」

「いやいや、何。降りようとした所君たちがいただけだよ。」

「とりあえず、こっちへ！」

男子生徒が机で作ったバリケードの中へ私を誘った。

「さて、自己紹介といこうか。私は神崎イブだ。」
(偽名を使うか迷ったが別にかまわない。どうせ非常事態なんだしな。)

「私は宮本 麗です。」

「小室 孝だ。」

「俺は井豪 永です。」

3人とも息がきれている。恐らく校内から走ってここまできたのだろう。

「ところで、あんたは？」

「ああ、素性について知っているなら何でも屋だな」

「どっかの部隊のようですが・・・」

「まあ、米軍の海兵隊の教官をしてた事あったな、大統領に頼まれ

て」

「大統領に頼まれたって・・・」

「んでな今回の任務の帰りにこの異常事態にでくわしてな、個人的な趣味で人助けだ」

「・・・、まあ。あなたの素性はおいとして、まず ありがとう」
「ございました」

「いやいや」

「孝！携帯をもっているのはお前だけだ。もう一度掛けてみるよ」

小室と名乗った少年は、懐から携帯を取り出した。

（警察か・・・）

「あ もしもし警察・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピッと携帯を切る音がする。

「相変わらずだ」

「やはりか・・・」

私の予想通りだった。

「何か知っているのかよ？」

「ガンシップから降りる前、辺りを見たが　ここと変わらなかった
しな」

「どうしてこんな事に……」

「畜生ッ！！！」

「2時間……ほんの2時間前まではいつもどおりだった
んだぞ！！それがどうしてこんなところに！！映画やゲームじゃある
まいし　分けわかんねーよ！！」

「おそらく、細菌兵器だ。」

「！！！！」

私の言葉に学生が驚愕の顔をする。

「神崎さん、何か知っているんですか？」

「いや、可能性として意見を言ったまでだ」

そいつか、と話は流れる。

「君らはこれからどうするつもりだったんだ？」

「ここに立てこもる予定です。」

(立てこもる……まあ、一般人が取れる手段の中でもっとも最良の
手だろう。だが)

「まっついていても恐らく、救援はこないぞ」

「なっ!!」

「これだけの自体だ。上の連中は「ぐはっ」「どうした!」!」
いきなり、井豪が血を吐き出した。

「永が!!」

「なんでだよ!ちよつとかまれただけだろ!どうしてこんなひどく」

「イブさんが言ったとおり、細菌兵器だとしたら 噛まれるだけで
もうダメなんだ」

「そんなのウソ!映画みたいな事なんて絶対に.....」

「まわりは映画どおりだ」

「孝.....手伝ってくれないか」

「何をだよ...」

「あそこなら地面まで真っ直ぐに... 多分 ぶつかった衝撃で
頭もわれるはずだ」

井豪が指先を差したほうは高い段差だ。

(なるほど、死んだあと仲間に迷惑を掛けられないか... 男だな彼
は...)

「何を言って.....」

「俺は 奴ら になりたくない！な 孝 頼む……俺は最後まで俺でいたい……」

「うげえっ」

（大量の血を・助かる見込みはないな）

「永！！いやああ 死んじゃだめえっ！」

ゴトと鈍い音がして

彼は彼”だったもの”になった。

（最後まで、男だったぞ少年）

「だめえっだめよおおっ！」

宮本は亡骸の上で号泣している。

（昔の私だ）

ふと昔の私を思い起こしてしまった。

「離れるんだ 麗」

小室の手にはバット

（友との約束か……）

「そんなことしちゃだめっ！ならないわ！永は 奴ら なんかにならない！！永は特別なのよ！！！」

「宮本・・感染に特別なものもない。まあ、血清をうってあるのなら可能性はないが、どの道その出血量からして無理だ」

ビク

死体が動いた。

「永！ほら！ 永が死ぬはずない……」

「うう……う……」

死体が立ち上がった。非常時に備えホルスターにしまつてある銃に手を掛ける

「そんな……こんなウソ……ウソよ……」

「確かに馬鹿ばかりだよ でも 本当なんだよ……！」
小室は友の最後の願いのためバットをふるった。

「いやあああああああ！なんてなんで……！」

「やらなければ 麗が喰われていた」

「私が……私は……助けて欲しくは無かった……！永のこんな姿なんて見たくなかった……！こんな風にして生き残るくらいなら永に噛まれて 私も 奴ら になりたかったのに……！」

「奴がそれを喜んだとは思えない」

「孝に何がわかるっていうの？ そうだわ そうだったのね……！」

「孝は本当は永を嫌っていたのね……！私とつきあっていたから……！」
(錯乱している……まあ、好きだったものを亡くしたんだ。無理も無いか)

「行こう、イブさん。生存者をさがしに」

「ちょっと どこに行こうってのよ!？」

「僕たちがいたら邪魔だろ 下に下りてイブさんと生存者探して脱出する。」

「なっ……何いつてるのよ! 2人でどうにかなるわけないじゃない!!」

一向に無視してバリケードに上る小室

「ねえ孝 やめてえっだめっだめえっ ごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい ごめんなさい」

(理不尽な言動だねえ。小室君可哀そう)

「本気じゃなかったの! 本気で言ったんじゃないの!! お願い お願いだから一緒に 一緒にいて!!」

(だきあっちゃってまあ これで一件落着だね)

【1人目】屋上の生存者（後書き）

4月5日。結構修正しました。

これから地道に修正を入れていくつもりです。

【2人目】今後の方針

今後のことを考えている間に、簡易バリケード（机）の外まで感染者が群がってしまった。

「本当にどうしたもんかね」

「・・・率直ね」

「ウソついてどうなるよ」

「まっただ」

ガシンガシン（バリケードを破ろうとしているおと）

「ふふっ」

「ハハハ」

「あたし やっぱりお父さんに連絡してみる 携帯かして」

「じゃあ、私もちよつと」

そっういい、2人からはなれ無線を鳴らす

ガガッ

『こちらハル。マスター？どうしました？』

「民間人学生3人と合流、そのうち1人感染によりやむなく・・・」
『・・・そうですか、こちらの方はまだ負傷やはでていません。そして、よくない報告ですがホワイトハウスと連絡がとれません。今、早急に調べてます』

「大統領と連絡が取れないとは・・・、そっうえばハル 俺が前回の

ミッションで手に入れた薬品を調べてもらえないか？潜入した研究所で1度資料を斜め読みしたんだがどうやら細菌兵器の資料だった。もしかすると・・・ウイルスだったとして、もしかしたら抗ウイルス薬、ワクチン等があってもおかしくない」

『そうですね。それも調べたいところですが人員が・・・では後ほどこちらが落ち着いてからその薬品とあなたと救助者を回収します。リカバリー・ポイント回収地点はそこから当家のある方角に100マイルほどいくと古い無人のヘリポートがあります。そこにヘリ1機をむかわせます。いつでも出るように準備しておきますので、近くにきたら連絡ください』

「了解した。じゃあ、そっちもきをつけて」

『マスターもご武運を』

ガガッ

2人のほうへ向かった。

「2人とも、ちょっといいか」

「ああ（ええ）」

「こっから、北西に100マイルほど行くと無人のヘリポートがある。そこに私たちの仲間がヘリで迎えに来る、お前たちも来るか？」

「今、俺たち俺たち以外の生き残っている連中と合流して協力しながら進もうと思っていた。行くあてがあるならそっちに行く。その案のるぜ」

「うん！」

「ふむ、では行こう。感染者が来る前に」

「おう！（はい！）」

その後、感染者は音が聞こえなければ襲ってこないということなので、ゆっくりと音を立てず1回へ降りていった。その間の指示 返事等は私が教えた簡易のハンドサインだ。ハンドサインなら音が出なく、指示がだしやすかった。

下に下りると、廊下で銃声が聞こえた。

「銃声……か」

（ガス銃に近い音だな）

「職員室のほうよ」

「向かうぞ」

（こつこつ音がするということは生存者がいるかもしれないからな）

「きゃあああああ」

悲鳴が階段の下で聞こえた。

急いで降りてみると

ツインテールの女の子がドリルを感染者の頭に突き刺し回しているのだ。

（シュールな光景だな）

私はそんなことを思いながら、mkを握った。

4体のうち、1体をヘッドショットで殺し、ほかは木刀をもっている女生徒が2人 小室が1人だ。

(木刀をもっているやつ見たことが・・・)

「高城さんっ」

宮本が高城と呼ばれる女生徒に近づき無事を確認する。

小室に木刀を持った女生徒が近づき

「鞠川校医はしっているな？私は毒島冴子 3年A組だ」

(白衣の人が鞠川 木刀を持っている女生徒が毒島というのか 毒島・・去年でた剣道大会でたしか)

「小室孝 2年B組」

「去年 全国大会で準優勝された 毒島先輩ですよ！ わたし 槍術部の宮本 麗です」

「あ えと び B組の平野 こ コータです」

「よろしくって神崎 神崎じゃないか！」

急に毒島が神崎といいはじめたから「だれのこと？」的なのマークを皆が頭に浮かべてる

(覚えてたのか、こいつにかっちやっただよな)

「ひさしぶりだな、毒島」

(とりあえず、返答しておこう)

「へっ！イブさん毒島先輩をしっているんですか？」

「ああ、去年 たまたま出てしまった剣道大会で毒島をまかしちまっただよ」

「ふ、あれから稽古をがんばったよ、今度てあわせしたいな」

「ああ　　そうそう。ここにいる大半が私を知らないとおもう
私は　神崎イブだ　よろしく」

「なにさ、みんなデレデレして・・・」

「何言つてんだよ高城」

「馬鹿にしないでよ！アタシは天才なんだから　その気になったら
誰にもまけないのよ」

（私も一応　天才なんだがな・・・）

「もういい　充分だ」

（ナイス毒島！こういう人の対応苦手なんだよね）

「あ　ああ・・・ああ　こんなに汚しちゃった。ママに言ってク
リーニングにださないと」

廊下にある鏡に映る自分を見て言う

（ああ、パニックってる　大丈夫か・・・？）

「う　う　う　ああ　ああああ　わああん」

（泣き出しちゃったよ）

とりあえず職員室に向かっているようなので職員室に向かった。

向かっている最中。コータという私とおなじガンマニアが「それ海
兵隊装備？」「そのスーツってどうなの？」とか聞いてきて。適
当に答えを返した。話がかなりあうので面白かった。そして驚いた
ことがあった。なんと釘を打ち出すガスガンは急ごしらえで彼が作
ったのだ。すばらしい。

向かっている間に、私については合衆国のエージェントでただの趣味の救助とっておいた。

- 職員室 -

入った直後私とコータで中の安全を確認し、ほかの奴らを中心にいれバリケードを作って入り口を封鎖した。

「皆 息ががっている すこし休んでいこう」
「ああ、それが懸命だ。大事なときにつかれて動けないとなってはな」

洗面台のほうで聞こえてきた。

「だからなに？コンタクトがやたらとずれるのよ！！」
（なにやっとするんだコータ・・・）

「鞠川先生 車のキイは？」

「あ バックの中に・・・」

「全員を乗せられる車なのか？」

「うつつ コペンです」

「部活遠征用のマイクロバスはどうだ？カギ掛けにキイがあるが」

「まだあります」

「バスはいいけどどこへ？」

「家族の無事を確かめます 近い順にみんなの家を回るとかして必要なら家族も助けて そのあとはここから北西にある無人ヘリポートにむかいます。」

「無人ヘリポート？」

（高城・いつのまにめがね・）

「ああ、イブさんの仲間が来る」

「仲間？助けなの？」

「いや、私の私兵の部隊だ。近くに着たら無線をして、ヘリを呼ぶ」

「私兵ってっ！どっかのお嬢様!？」

「なにをいつている。神崎家をしらないのか？」

「神崎家って、あの!？ お金持ちの」

「まあ、実際私の稼いだ金なんだが・、そんな話はおいておけ。今は関係ない」

「そうね、いろいろ突っ込みたいけどやめておくわ」

「どうしたの？」

宮本がTVの前に立ち尽くしている。

「なんなのよ これ……」

「麗 どうした……!」

ピッ

《……です 各地で頻繁する暴動に対し政府は緊急対策の検討に入りました しかし自衛隊の治安出動に対しては与野党を問わず慎重論が強く……》

「暴動ってなんだよ 暴動って」

ピッ

《……ません せでに地域住民の被害は1000名超えたとの見

方も有ります 知事により非常事態宣言と災害出勤要請 パンツ発砲です！ついに警察が発砲を開始しました！！状況はわかりませんが・・・きゃあああああ！！ いや なにっ うそっ た助けっ うあっああああ！！》

《・・・何か問題が起きたようです ここからはスタジオよりお送りします》

「それだけかよ どうしてそれだけなんだよ！ パニックを恐れているのかよ」

「いまさら？」

「いまさらだからこそ よ！ 恐怖は混乱を生み出し 混乱は秩序の崩壊を招くわ そして秩序が崩壊したら・・・どうやって動く死体に立ち向かえるというの？」

「そうだ、高城の言うとおりだ。早い話が混乱したら、感染者の格好の餌食ってこと」

「朝ネットをのぞいたときはいつも通りだったのに・・・」

「信じない 信じられない・・・たった数時間で世界中がこんなになるなんて」

「残念だが真実だな」

「ね そうでしょ？ 絶対に大丈夫な場所 有るわよね？きつとすぐいつもおりに」
「なるわけないしー」

「そんな言い方することないだろ」

「パンデミックスなのよ？仕方ないじゃない？」

「パンデミックス・・・」

「パンドミックスカ」

「？」

「感染爆発のことよ！世界中でおなじ病気が大流行していること

「インフルエンザみたいなものか？」

「1918年スペイン風邪はまさしくそう 細菌だと鳥インフルエンザにその可能性があるといわれてたわ インフルエンザをなめちやいけないのはわかってるわよね？ スペイン風邪なんかかん感染者が6億以上 死者は5000万人になったんだから・・・」

「それより14世紀の黒死病に近いかも・・・」

「そのときはヨーロッパの3分の1が死んだわ」

「どうやって病気の流行は終わったんだ？」

「いろいろ考えられるけど・・・人間が死にすぎると大抵は終わりますよ 感染すべき人がいなくなるから」

「でも、死んだ奴ら動いて襲ってくるよ」

「拡大がとまる理由はないということか」

「これから暑くなるし肉が腐って骨だけになれば動けなくなるかも」「どのくらいでそうなるんだ？」

「夏場なら20日程度で一部白骨化するわ 冬だと何ヶ月もかかるでもそう遠くないうちには」

「そういう状況だともし私がお偉いさんで核をもっているなら、私は迷わず感染者の真ん中 すなわち人口が密集しているところを打つな」

「核って!?!」

「だから一応、そういう可能性も考慮してうごかなきゃなんないわね」

毒島さんが口を開いた

「家族の無事を確認した後へリポートに向かう。ともかく好き勝手に動いては生き残れまい。チームだ。チームを組むのだ生き残りも拾っていこう」

「私がかまわないよ」

「どこから外へ」

「この地理はしらん。君らにまかせるよ」

「駐車場は正面玄関からが一番近い」

「いくぞ!?!」

そして7人はバスへ向かった。

【3人目】学園から脱出

軽い状況把握を終え 私たちは、職員室から外に出ようとしていた。

「最後に確認しておくぞ 無理して戦う必要は無い 避けられるときは避ける！ 転がすだけでも良い」

（そうだな、1体1体に時間を掛けていると、取り込まれる可能性があるからな。私も10人もいたらひとたまりもない。まあ、RPG（RPG-7）があつたら別だけど・・・）

「連中 音にだけ敏感よ！ それから普通のドアなら破るぐらいの腕力があるから掴まれたら喰われるわ 気をつけて！！」

「ドアをか・・・凄いな」

キャアアアアアア！！

「！！！！」

廊下の下より悲鳴が上がる

そこには、数名の男女生徒がいた。

即座に私たちは戦闘態勢に入った。

（弾はもつたないこれで十分か）

私は背中に掛かっている大型ナイフを持ち静かに近づいた。

ザクツザク

私は乱舞するかのようにナイフで感染者の首をはねていった。その一方、他の奴らはしたから迫ってくる感染者を倒していった。

(それにしても、良い連携だ)

「あ　ありが・・・」

「礼は良い、静かにしろ感染者がくる。　負傷者はいるか？」
礼を言ってくる女生徒を黙らせ、確認した。状況確認は戦場・潜入の基本だ

「え・・・いません　いません!!」

「大丈夫みたい　本当に」

「私たちは学校を出て、安全地帯に行く。同行するか？」

「え　ええ!!」

彼女たちは希望を見つけたような瞳をしていた

階段を降り、やっと玄関に辿りついた。

私と小室は周囲を探る。

(意外と多いな、それにこの人数だと・・・)
「やたらといやがるな」

「そつだな、どうするか」

「見えてないから隠れること無いのに」

「その説はあっているのか？証明してみるか？」
半ば意地悪にいった。

「！」

「たとえ高城くんの説が正しいとしてもこの人数では静かに進むことはできない」

「そつだな、単独ならまだしも 集団だと」

「校舎のなかを進み続けても・襲われたとき 身動きが取れない」

「玄関を突き抜けるしかないのね」

「誰が・・・確かめるしかあるまい・・・」

「よし 僕が行くよ」

小室が言い出した。

「いや、その役 私が引き受ける。単独の潜入なら得意分野だし、これもある」

私はスニーカーキングスーツに指を指す

「では、皆は何かあったときのために待機しておいてくれ」
「わかった」

私はm kをもち、感染者の前に姿を現した。

(どつやら、目は見えてないようだ 音だけか。じゃあ 扉の音にも反応するのか どうやって注意をそらすか・んっ!)
私は足もとに転がっている靴を見つけた

(これで注意をそらせれば良いが)
靴を皆がない方へと投げた

そうして、靴が落ちた音とともに感染者は靴のおちた方へ向かっていった。

(成功か、今のうちに)

感染者が辺りにいなくなったのを見計らい、ドアをゆっくりと開けた。

ハンドサインで、皆に知らせ外に出た

「こつちだ 早く」

ガキイイイイン

どこからか高い音が校舎から聞こえてきた。

感染者は校舎へ向かってきた もちろん私達のいる玄関にだ

「走れ!!」

小室はさげんだ。

(こつなつてはしょうがない 銃を使うか)

私はmkを構えながら、バスへ走っていった。

必要最低限に倒しながら進んだ。非戦闘員（鞠川 高城）をもカバ
ーしながらだったか毒島もまわってもらえたので楽だった。

だが、あともうすぐという所で助けた男子生徒の1人が負傷した。
「卓造！」

助けた女生徒の1人がその男子生徒のほうへ向かおうとしたが高
城が止めた

「あきらめて！！噛まれたら 逃げても無駄……」

その女生徒は涙を浮かべていた。恐らく恋人同士だったのだろう・
「待つ…… ちゃんと教えてあげたのに！どうして戻るのよ！
！信じられない！！」

「……」
「私 わかるわ」

信じられないという顔で宮本と高城は鞠川を見ていた。

「もし世界中がこんなになってしまったなら…… 死んでしまっ
た方が楽なもの」

「あんたそれでも医者な「あぶないっ」……」
感染者をコータが撃つ

「落ち着いてください 高城さん」

「この腐れヲタ！何の権利があつて私の話の邪魔をするのよっ」
（おいおい、どこの女王様だ……）

内心 笑っている

「~~~~ツ お話なら 俺が後でいくらでも付き合いますから」

(大人だぞ コーター!!)

「仲良しで羨ましいことだ」

「本当だな」

「先生！キーを!!」

ようやく到着した。

全員が乗り込み始め 私はバスへ乗り込み 窓を開けM4を構え狙撃した

「いまだ 小室 毒島!! 乗れ!! 後ろは私が守る!!」

2人は乗り込む

そして小室がドアを閉めようとする

「.....くれえっ!!」

遠くから数名の生徒と教師らしき男がかけてきた

「3年A組の紫藤だな」

「.....紫藤」

宮本は近くにいた私しか聞こえなかったが殺気が混じっていた。表情はスコープを覗いているため見えない

(教師は紫藤というらしいな・・・それにしても宮本の先ほどの発言・いやな予感が・・・)

「もう出せるわよ!!」

「もうすこし待ってください!!」

「前にも来ている!集まりすぎると動かせなくなる!!」

「踏み潰せばいいじゃないですか」

(んな、あほなことを)

「そんなことしたら横転する!!」

それを聞いたとたんあいつらを助けようとバスから出ようとするが宮本がとめた。

「あんな奴 助けることないわ!」

(なにか 恨みでもあるのか・・・?)

「麗!!なんだってんだよいったい!!」

「助けなくて良い あんな奴死んじゃえばいいのよ」

そう私の後ろで口論しているがその一方私は狙撃をされていてトンでもないものを見てしまった。

その光景は足を挫いてしまった生徒を足で蹴って置いてきたのだ

(教え子になんてことを・・・宮本があんなことを言った理由もわかった気がする)

そして、乗り込んできた

「鞠川先生!!行きます!!」

バスはかなりのスピードで校門へ向かった

「……助かりました リーダーは毒島さんですか？」

「いや そんなものはいない 強いて言うなら 彼女だ」

毒島は奥で装備を整えてる私を指差した

「彼女は？」

「私はア（ry）」

以前とおなじ説明をした。

バスは校門を出て町へ向かった。

【4人目】下車

(とりあえずの安息か)

バスは校門を出 隣町に向かった。無論 あいつらの親を探しに・

(今のうちに、装備を直すか)

今 私はコータの隣の席に座っている。

(コータが目を輝かせているな。コイツの腕はまあ、新兵より使える位か・・そうだ)

私は腰にあったmkを見て思いついた。

「コータ、お前の武器は？」

「あっはい師匠、工作室で作った 釘打機のカス式ですけど・・・」

突然話しかけられて困ったようだった。私がコータと呼び捨てにしているのは以前話したときによびすてでいいと言われたからである。コータが師匠といったわけは よくわからない。

「それじゃ、効率悪いだろ。これやるよ ここ 戦場 で生き残る仲間を守るために使う武器だ」

私はmkをホルスターごと渡す

「えっいいんですか？ありがとうございます！！」

彼は礼を言った後、即座に残弾を調べていた

(なかなか いい目の付け所しているな)

残弾を確認するのはいざ使って弾切れになっただけでは困るからだ

「これもやる」

ベストに入ってた、ありったけの予備マガジンを渡す。

「ありがとうございます。でも 本当に師匠は何者なんですか？」

「だからいったる エージェントだって」

間違いではないが早い話が何でも屋なのだとおもう職業だ

「なんで俺たちまでつきあわなきゃいけないんだ？ お前ら 勝手

街へ戻ると決めただけじゃんか」

後から乗ってきた男子生徒がわめく

(勝手な奴らだ あんた達が勝手に乗っただけだろうに)

私は人を見る。腐った魂の奴らは嫌いだ 嫌いな奴らにはとことん
非情にできる

「寮とか学校の中で安全なところを探せばよかつたんじゃいか!？」

「そうだよ・・・このまま進んでも危ないだけだよ どこかに立て籠
もった方が さっきのコンビニとか」

「そうか ならばバスには乗らず学校に立て籠もっていたらよかつた
じゃないか!？ コンビニに立て籠もっていればどう? そうやってぐ
じぐじ言っているなら そうしな それに勝手に乗ってきたのは君
たちだ なぜ君は乗った? 1人で立て籠もっていれば?」

おもわずさつきからぐぎぐじ言っていた男子生徒に本音を言っ
てしまった。

キッ！！

バスが止まった

「もう いい加減にしてよ！ こんなんじゃ運転なんか出来ない！」
鞠川が言った

「すまなかつたな 鞠川」
とりあえず、謝った。

(たしかにこんな状況じゃあな やる気が失せる)

「~~~~~ッ」

男子生徒は何もいえない

「んだよあつ 何見てやがんだ やろうつてのか？」

やっと何か文句言える言葉を見つけ言ってきた 小室に今度はあたる

「ならば 君はどうしたいのだ？」

「うつ・・・気にいらねーんだよ こいつとそこの女もきにいらねーんだ」

私にも言ってきた

「なんなんだ えらそうにしゃがって!!」
コータがmkを握る私はそれを手で抑止する

「なにがだよ？イブさんと俺がいつお前に何かいったかよ？」
無言で立ち上がる宮本 そして男子生徒に近づく その手には
「ためえっ!!」 なん・・・」

ドフッ

宮本が持っていた 長い棒が男子生徒を突いた

男子生徒はもがいた

(やんでれですね ハイ)

久しぶりに昔に戻った私

「最低……」

(やんでれですな) まじかで見るとこええ まあ、あの程度だと
返り討ちにできるけど)

「れ……」

「孝」

パチパチパチ

拍手が聞こえる 私は振り向いたその先に紫藤がたっていた。

「実にお見事！すばらしいチームワークですね 小室君宮本さん！」

嫌いな作り笑顔だ

「しかし……こうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなっ
ています だからリーダーが必要だよ 我々には……！」

「で 候補者は1人きりってわけ？」

「私は教師ですよ 高城さん そして皆さんは学生です。それに神
崎さんは部外者ですし それだけで資格の有無ははっきりしていま
す」

(こいつの裏は取れている　あとはタイミングか)

「どうですか　皆さん？　私なら問題が無い様に手を打てますよ？」

パチパチパチパチ

拍手があがる

「・・・という訳で　多数決で私がリーダーということになりま
笑わせるな！　口先だけの下種野郎！！」

私の発言により静まり返った

「なにが問題ない？　わらわせるな　さっき私が見たのはなんだった
か　私はスコープ越しでみた。貴様が貴様らといた足を挫いた男子
生徒を足蹴りで顔を踏み潰してきたのを　問題おありだろうか？」

紫藤はよろよろと後ろへ下がった。私が事実を言った瞬間皆が目を
張った

そのとき我慢の限界なのか宮本が外へ出てそれを小室が追った　そ
して　前からバスが来て倒れ炎上し分かれてしまった

「鞠川校医！　ここはもう進めない」

小室の後を追った毒島が戻ってきてきて指示を出す

その後バスはバックし別のルートを使った

「さて、もう一度聞こう　貴様にとって問題ないことなのか？」

「そ・・・それは・・・生き残るために仕方なく・・・」
汗だくだくで答える紫藤

「ほう、では貴様が先ほど言ったのはなんだ？ 問題ないように手をうつつだ？うててないだろ？」

「・・・では・・・あなたは誰が適役だと？」

「そんなものいらん 助け合いでカバーすれば良いだろう？」

「では先ほどのようなことがおこるじゃないか！？だからリーダーが必要に」

（ばけの皮がはがれてきたな・・・）

「貴様はさつきからリーダーリーダーと ただ単に貴様が人の上になんかたいだけだろう？」

「そ・・・そんなことは」

「そつえば貴様 汚職政治家の実の子だったな なら理屈がつくか」

「ッ！！」

その場にいる全員が固まる

（ドツカで聞いたことがあると思って調べさせたが まあ 使えたか）

バスが走り出した直後 ハル確認を取らせたのだ

「なぜおまえがそれをつ！！公安の奴をだまらせたのに!？」

（ばけのかわが外れたな）

「私を誰だと思っているのだ？世界三大家系の1つ『神崎』家『当主』だぞ？それくらいの情報探りを入れればすぐのことだ」

世界三大家系とは要するに金持ちでその財産は 国に匹敵するほどだ。そのうちの『神崎』家はその中でダントツに金持ちなのだ。といつても当主 イブ がそれを1人で稼いだのだ。その多大な財産のため国のトップさえ頭が上がらない。

その発言により全員がより硬直した

「おまえがだどっ!? 馬鹿な!! おまえがだど!?」

「疑うか では貴様について語ろう 先ほど仕入れた情報を 大臣は昔 愛人を困い貴様に弟が出来た その後貴様の母は酒で死に

その後父の決めた大学を出 その父が理事を勤めている学校に赴任 その後貴様が継ぐはずだったが弟に継がれそのご弟を手伝う一方 弱みをつかむため各方面に探りをいれたものの収穫はなしその後ある日父に電話で「公安の奴に裏金の出所を探られているその公安の奴にはお前の通っている学校に娘がいるそいつを留年させろ」と命令され実行 ああ、最低な教師だな 貴様は」

ドSモードが入ってしまった括弧笑

「な なぜそのことをはっ!?!」

その場にいる全員が信じられないという顔をする

道が込んできた

「さて コータ 毒島 高城 鞠川 降りるぞ。ここからは徒歩だ
というか こいつといると吐き気がする」

正直な本音を言ってしまった

「君は!」

ダンッ!!

紫藤が口走った瞬間紫藤の頬は切れた

「ひっ」

「ひ・・・平野君・・・？」

「外した訳じゃない これを初めて撃ったからぶれたんだ」

コータはmkを構え紫藤に向けている

「き 君はそんな乱暴な生徒では・・・」

「俺が学校で何人やつつけたと思っっているんです？だいたいおまえは前から俺のこと馬鹿に

してやがったじゃねーか！！ 我慢してきた 俺はずっと我慢してきた！ 普通に生きたかつたからずっと我慢してきたんだ！！でもそんな必要もない！！普通なんてなんの意味も無い！！ 殺せる 生きてる奴だつて殺せる」

（うっぶん溜まってたんだねえ）

「ひ 平野君 そんなことは・・・」

紫藤は動揺している

「師匠は先に降りてください ぼくが後衛をつとめます」

「・・・では頼んだよ弟子よ」

そうして私たちはバスを降りた

【4人目】下車（後書き）

感想まっています!!

【5人目】突入

「どう進む？私はこの辺りはよく知らん！」

バスから降りた私たちは 小室たちと合流するためこれからどう進むか話し合っていた

「私もだ、地図上ではどういう風になっているのかは日本は大体把握できている。だが、現地と地図上では違うからな」

「とりあえず御別橋を確かめてからがいいわ」

「いや、それは確かめる必要もない 封鎖されている こういうことは大概が交通機関を封鎖するという対策が採られているだろう」

ウイルス等が蔓延したときは隔離して自然消滅をさせる策がとられる。最悪殺処分だ・・・

「じゃあ、どうやって渡るかよね橋を」

「水陸両用車があれば問題ないのだが・・・」

(自宅にあるがあいにくその自宅に戻るためなんだがな)

ヴオオオオオオ

遠くからバイクの音が聞こえる

「あれは・・・」

遠くから、バイクをのって来る男女

(合流地点まで行かなくて済むか・・・)

その男女は小室と宮本だった

「先生！」

「あらあら宮本さん 小室君も！」

宮本が鞠川にだきついた

「無事で何よりだ小室君」

「バイクの無免に2人のりか・犯罪だなククククッ」

「毒島先輩もイブさんも それとイブさん、あなたもいえないですよ!!」

「確かにな」

ぐいぐいと小室を引っ張る高城

「ぶ 無事でよかったよ高城も平野も」

「・・・渡河する方法を見つけれないでいる」

「僕らも同じです」

「上流は？」

「この辺りは護岸工事とかしちゃったから渡れないけど上流ならいけるかも」

「ほら 小学校のとき遊んでて流された子がいたじゃない」

「あ・・・でもどうかな この間雨降ったから増水してるし・・・」

「

「あの・・・」

まさかの鞠川の発言により注目があつまる

「今日はもうお休みにしたほうがいいと思うの」

「お お休みて」

「いや コータ、私はその休息をとる案は悪いと思っていない。疲れがたまれば動きが鈍くなる」

「1時間もしないうちに暗くなるから 暗くなって出くわしたらいくら毒島さんとイブちゃんでも大変でしょ？」

もう夕方なのだ

「それはそうだが どこで朝まで時間をつぶすの？」

「籠城でもするか」

毒島は背後にある城を見ながら言った

「広すぎるって」

「あ あのね 使えるお部屋があるんだけど 歩いてすぐの所」

「カレシの部屋？」

ニヤニヤ顔で高城

「ち ちがうわよ お 女の子のお友達の部屋だけど お仕事が忙しくていつも空港とかにいるから鍵を預かって空気の入れ替えをしているの」

あたふた動揺し答える鞠川

(W)

「マンションですか？周りの見晴らしは いいですか？」

「あ うん 川沿いのメゾネットだからすぐそばにコンビニにもあるし」

(食料調達はどの道必要だしな)

「あ あとね 車も置きっぱなしなの 戦車みたいな四駆の」

ジェスチャーする鞠川

(軍用か・・・?)

「移動手段はどの道必要だ」

「確かに今日はもうくたくた 電気が通ってるうちにシャワーを浴びたいわ」

「そ そうですね」

「静香先生 後ろにのってください」

「あ うん」

「先生と一緒に確かめてきます あの毒島先輩 イブさん 後のことは」

「承知(了解)した」

私たちは小室たちのあとを徒歩で追った。しばらくして鞠川が遠くから手を振ったのが見えた

「・・・いつたいどんなお友達なのよ」

「奴らは塀を越えられないだろうから安心して眠ることは出来そうね」

「高城 なにか使えるものあるか？拳銃は手に入れたけど当てる自

身はないんだ」

ウウウウウウ

家の中から大量の感染者が出てきた

「小室！これでいい？」

バールを小室に手渡した

「ああ 十分だ さがってる」

「お互いカバーしあうことを忘れるな！」

「行くぞ！！！」

私は大型サバイバルナイフをもって走り出した

【5人目】突入（後書き）

最近いそがしいので更新できませんでした。

短いですが 今後も頑張りますのでよろしくお願いします。

感想まっています。

【6人目】一時の休息

SIDEイブ

かぼーん

私たちは鞠川の友人宅で一時籠城をしている。そして今現在 私は風呂に入っている

(いや、1人ならいいんだが みんなと一緒にしてさ・・・ははは)

そう、フロは女性陣のみんなが入っている。転生者のもと男なのだがもう、18年も女として過ごした為べつに鼻血をふいたりするわけではない だが・・・

「うわっ先生って・・・本当に大きい」

「うん よく言われる」

たびたぶと自分の手で胸を持ち揺らす鞠川

(でも、興奮しちゃうよ・・・)

「くうっ なんて自信满满的・・・」

「えっいつ!!」

わぽま

鞠川の胸をもみだす宮本

「あひゃ だめえ、 だめっ そこはだめえ ゆるしてえ」

(ノノノ やばい 心臓ばくばくだ・・)

「又ルい18禁ゲームじゃあるまいし」

「「なんで皆ではいつてるんだか」」

私はやっこの思いで疑問をだしたが、高城と声が被った

「高城も神崎もわかってるだろうっ?」

「それは そうだけど・・」

「いや わかんN・・」

しゃわーーっ

毒島に私と高城は水をかけられる

「「ひああああ」」

「思ったよりいい声だな」

高城は桶に水をいれ反撃した

「んっふっあっ ふー」

「くっっ こんなときまで姉系の反応とは」

私は無音無気配で後ろから近づき

っ

毒島の背中を人差し指でなぞった

「ひああああん!!」

「ふっふっふっ 仕返したぞ」

「く、不覚・・・」

「やったな高城」

「ええ」

私たちの勝利?だった

まだ、浴槽で揉みあっている2人がうしろになっていて 凄いことになったのは御想像にお任せします

風呂から上がり、鞠川が冷蔵庫から缶を取り出して来て風呂から上がった奴に配った

みんなでそれを開け飲んだ

「「くっくっ」」

「・・・鞠川?これアルコールじゃ?」

「そうだったみたいね ふふふふふ」
鞠川の様子がおかしい。のんでるみたいだ

「私・・・酔うと・・・」

だんだん理性が・・・

と私は酔われてしまった ここで言っ
てイブはお酒が極端にダメ
なのだ・・・

S I D E O U T

S I D E コータ

イブが風呂に入った数分後のこと

「楽しそうだなあ」

と小室。今、風呂に女性陣全員が入っている、
その中で楽しそうに笑っている声が聞こえる。

「セロリーを守って覗きいく？」

「俺まだ死にたくない」

僕もちょっとは覗きたいと思ったが小室と同じく僕は自殺志願者ではない。師匠に「覗いてみる！覗いたら命はないと思え」と言われた。僕ってそこまで信用ないかなトホホ・・・
「これで何も入ってなかったら頭痛いな」

そう、僕たちは今重火器が入っているとおもわれるロッカーをこじ開けている

「入ってるよ 弾薬あったんだから絶対に・・・」
「まあいいさ いくぞ！」

小室と梶子の原理でこじあける

「「うおっ！！」」

開いた瞬間押していた方向に倒れてしまった

「いつてえー あ・・・おい 平野」

「！」

小室の言葉に起き上がる

「やっぱりあった・・・」

そこには3丁の銃が立てかけてあった

「静香先生の友達だっていったよなこの人」
「一体どんな友達なんだ？」

「スプリングフィールドM1Aスーパー・マッチかセミオートだけ
ど まM14シリーズのフルオートなんぞ弾の無駄遣いにしかなら

ないし」

これで師匠と並んで戦える・

「あの・平野？」

「マガジンは20発入る！！日本じゃ違法だよ違法 うふ」

「おいひらのー」

「ナイツSR-25狙撃銃・・・いや 日本じゃそんなものに入らないからAR-10を徹底的に改造したのか！ロッカーに残っているのはクロスボウ ロビン・フッドが使っていた奴の子孫だよ バーネット・ワイルドキャトC5 イギリス製の有名な猟用クロスボウだ」

小室が銃を取る

「それはイサカM-37ライオットショットガン！アメリカ人が作ったクールなショットガンだ ヴェトナム戦争で活躍した」

「へー」

『ジャカッ』

小室がポンプを引いた そして平野に銃口を向けた

「うおおわあ！！たとえシエルが入ってなくても絶対に人へ銃口を向けるな！！向けていいのは・・・」

「 奴ら だけか・・・本当にそれですめば良いけど・・・」

「 小室も手伝ってよ 実は面倒なんだ弾を込めるの」

僕はマガジンに弾を込めながら話す 小室も参加してくれた

「エアソフトガンで勉強したのか？」

「まさか 実銃だよ」

「本物もったことあるのかよ!？」

「アメリカに行ったとき民間軍事会社・・・ブラッククウォーターのインストラクターに1ヶ月教えてもらった」

「おまえって・・・そういう方面だけは本当に完璧なのな 嫌われなくて」

「にしても どういう人なんだ静香先生の友達?ここにある銃絶対に違法だろ?」

「基本的には違法じゃないよ ここにある銃とパーツを別々に買うのは その後で組み合わせたら違法になる」

「でもS・A・T(警察特殊部隊)の隊員だって静香先生が・・・」
「警官ならなんでもありかよ?」

「普通の人じゃないのは確かだね?結婚してない警官って本来なら寮に住まなければならぬはずなのにこんな部屋を借りてるなんて実家が金持ちか・・・付き合っている男が金持ちか汚職でもしているか・・・」

考えればいくらでも理由はあつた

風呂が騒がしい。悲鳴も聞こえるが大事なことではない悲鳴だ でも

「さすがに 騒ぎすぎかも」

「大丈夫だろ 奴らは音に反応するけど 一番うるさいのは橋のほうだし」

しばらく双眼鏡で橋のほうを見つめていた

「映画みたいだな」

小室に渡され双眼鏡を覗く

「『地獄の黙示録』にこんなシーンが……なんだあれ？向こうに妙な連中が」

『パツ』

小室がTVをつける

そこにはたちの悪い講義団体が映っていた

「殺人病って」

「奴らのことじゃないかな？ 奴らが日本政府とアメリカが共同開発した生物兵器が漏れたからだって言っているのか……」

「正気かよ！死体が歩いて人を襲うなんて現象 科学的に説明がつかずしないのに」

僕は科学は苦手だが師匠からウイルスの可能性が高いそうだと
でも詳しく聞いていないのでよくは分からない……

「ってことは連中設定マニアなのか それとも悪い病気が 左翼だよね？」

「確かに左翼は設定マニアで悪い病気だ 極右の人種差別主義者と
同じくらい悪い病気だよ」

「小室もそうということも言うんだ」

「お袋の同僚にいまでも左翼活動やっっているのがいてさ 学校で起きていた苛めは見て見ぬフリをするような反戦平和主義者様だった。」

「お袋さんの仕事は？」

「小学校の先生！！川の向こうの御別小学校で 1年生のクラスを持つてる 生徒がいるかぎる逃げないな・・そういう人なんだ」

「お袋さんも左翼？」

「まさか！俺のお袋だぜ？むしろ若い頃は・・」

『パンツ』

TVから銃声が聞こえてきた それを僕たちは見た

「うわぁ どうにもなくなってる ヤバいな」

「すぐに動いたほうが」

「だめだよ 明るくならないと 奴らにいきなりやられるかも」

「ひっ！！」

暗闇から手が小室に伸びる

『むにゅん』

「はへ？」

「んはあ ーっむっろっくくん」

『むちゅっっっっっ』

「せ 先生 酔ってるんですか？」

「ちよっとちよっとだけよ ふふーん あ
完全にできあがっている

次のターゲットは僕に向かったようだ

「コータちゃん」

「ちゃん？ あのえと あは」

「んーゆ」

『チユ』

ほっぺにキスされた

も もうなにがなんだか・・・？

「大声はダメです下へ行ってください」

「えーだめー しずか お外こわいからずっとこっごしてるのー」

「平野 見張り頼む よおいしょっと」

「あ うんうん」

どうやら小室は1階に先生を下ろすようだ

『ヒューー』

扉のほうから風が吹き風に揺れる そこから影が・・・

「……たああ？」

そこには下着の師匠の姿が

僕 大丈夫かな？

【6人目】一時の休息（後書き）

更新遅くなりました。すいませんでした。

いや あせりましたよ アニメで追いつかれちゃいそうなんですもの・・
ええがんばりましたよ

アニメでは戦闘シーンが出ましたね 毒島先輩の回転切り・・凄かった

ではぼちぼちかいていくのでよろしくお願いします。

感想もおまちしておいます。

【7人目】もう一人の・俺？

「こーたああ？」

あの事件 以来 神崎 歩姫 の人格は2つに分かれた。
神崎 歩姫 としての人格と 圭一 としての人格。いわば、今の
神崎イブは2重人格なのだ。このことは今はまだ、ハルしか知らない。

で、今は 酒を飲んだことにより覚醒した 圭一 としての人格
が表に出ている。状況などは 神崎 歩姫 としての人格を通して
知っている。

「し 師匠？」

おびえるコータ

「師匠？何をいつている？俺は圭一だ」

「へ？」

「ああ、1つ言ってなかったな 俺たちは二重人格だ。まあ、たま
にしか俺は表に出てこないが」

「.....」

「.....」

転生者ですつて言えることもなく、精神的な病気 解離性同一性障
害 にしておいた。原因は弟の死（いないよ。作り話）
（だって、んなこと言ったら沙耶がうるさいんだ物）

「そ そうなの・・・」

皆が若干暗くなる

（俺なにか悪いことでも？）

作り話が悪いのである。

暫くお話中

「それより警戒はいいのか？」

「そうだ！」

思い出したかのようにブランドに行くコータ

「やばいよ 圭一さん」

俺もブランドへいく そして孝・冴子もついてくる

そこには、猟銃を持って戦う不良がやられる光景だった。

「……………」

しばしの沈黙

「畜生 ひどすぎる……………」

「小室っ」

「なんだよ？」

「撃つてどうするつもりなの？」

「決まっているだろ！ 奴らを撃つて……………」

「撃つと銃声が鳴り感染者は寄ってくる そうなると俺たちが危険になる 簡単な構図だ」

「そして 生者は光と我々の姿を目にし群がってくる」

「もちろん 俺たちでは助けられない……………まあ表の 神崎 歩姫

としての人格は助けるつもりのようにだけ」

「彼らは己の力だけで生き残らなければならぬ 我々がそうしているように 何がしたいか分かる 宮本から聞いたよ 君は過去一日に対して厳しくあるものの男らしく立ち向かってきた だが……………見ておけ なれておくのだ！ もはや この世界はただ男らしくあるだけでは生き残れない場所と化した」

「圭一さんと毒島先輩はもう少し違う考えだと思ってました」

「孝 現実はそのなんだ 俺も好きで言っているわけではない」
「私もだ」

そう言ったあと俺は外へ行った。なぜ外へいったって？

そりゃハルに無線で頼んでおいた新装備が特殊な箱に入って空から落ちて支援されることになっていた。このことも表の人格からの情報

俺は駐車場で箱を見つけ 又上上がった。又上上がった。

「圭一君それなに？」

コータが箱を指差し問う

「これか？うちの奴からの新装備だそう。中身もわからん」
今回は形 異様なのだ、任務のときも大体が四角い箱なのだが、今回は異様に長い。

あけてみた、そこには 刀とスニッキングスーツらしきものとヘルメット、弾薬 俺のガバメントカスタム 手紙が入ってた。

手紙を読んでみた。内容は以下の通り。

マスターへ

この中に入っている物の説明をします。
刀が入っていますよね？それは高周波ブレードという刀です。高周波振動発生機を刀にくっつけたものです。刀身は超高速で振動し、この振動によって物体を切削するため、通常の刃物を遙かに越える威力を持っています。（ちなみに鉄の扉も切れます）基本的には鞘に納めると

機能がとまります。

そのスニークングスーツは対感染者用強化外骨格です。ちなみに事件発生から5時間ほどで開発班が作ってくれました。今では全員これを着て任務にあたってます。特殊な素材で作られており、人の歯・というか日本刀 銃弾程度では貫通しません。なので噛みつかれても多少の痛みはありますが感染はしません。これは一応 強化外骨格なので足の速さ、筋力等が格段にあがります。仕込み武器も多数あるので後で試してみてください。

そしてヘルメットですが、レンズには今の位置情報・軍事 警察の情報・屋敷の現在の情報がだせます。ガスマスク効果もあり、無線・望遠機能も付いています。

弾薬のほうはショットシェル・5.56の弾と45口径の弾を用意させていただきました。

屋敷においていったマスターのガバメントをいれさせてもらいました。

上の電子機器ですが全部自己発電機能があり電池切れはなく また全てにEMP対策を施させていただきました。

マスター 御武運を

だそうだ。

(これってさ、転生前のメタル アの雷 じゃん!)

とりあえず全部着てみた。

「軽いな・・・」

それが本音だった。

俺は望遠機能を使い外を見てみた。

そこには父と娘のおやこがいた。そのおやこは助けを求めた家の者に父のほう刺されてしまった。

「ロックンロール!!」
バンッ

平野が小さな女の子に迫る感染者を狙撃した

「試写もしてない他人の銃でいきなりヘッドショットを決められるなんて！ やっぱこういうことは天才だなあ俺 ま 距離は1000もないけど」

ピュンッ

俺はサイレンサー付きのガバメントカスタムを片手うちで1000m先の感染者にヘッドショットした。

「1000m以内ならハンドガンでヘッドショット決められないとな弟子よ」

「師匠・・・汗」

「撃たないんじゃないのか？生き残るために他人を見捨てるんじゃないかったのか？」

「小さな女の子だよ？」

「俺とイブの弟子が選んだ道だ それに俺も助けたいと思ったから

な それに新装備を確かめるいい機会だ 孝！こーた！援護射撃
頼む！くれぐれも当てるなよ？」

「わかってるって！！（わかりました！！）」

俺は下へと降りていった。

「「！！」」

下へ行ったら麗と冴子がいた。

「なにその格好！？」

「新装備だ それと小さな女の子をたすけてくる」

冴子の目がブレードに移ってる

「バイクで。冴子にこの家をまかせる」

「わかった！ここは何があっても守る 安心して行って来い！」

俺はバイクに乗っかりできるだけ感染者をひきつけながら走っていた。

「でりゃ」

グシャ

「おりゃ」

シュパ

「神崎流奥義 - 百花繚乱 -」

シュパパパパパ

感染者の首が10単位で吹き飛ぶ

高周波ブレードを使いながら女の子までたどり着いた。

「大丈夫か!？」

「きゃあああああ!！」

感染者が女の子に迫る

SIDE 高城

私はなにやら五月蠅く玄関のほうだったので行ってみた。

「一体何の騒ぎよ?」

「いいことがあったの」

嬉しそうな顔で宮本が言う

「なによ？」

当然聞く

「私たちはまだ人間だって分かったのよ！」

その後先輩から大体の流れを聞きほかの奴の所へ向かう

「先生！ ちょっと起きて！ 静香先生！」

私は裸で寝ている先生をおこしに先に来た

むにゃむにゃ

「はえ？ もうあさごはん？」

「ぼけてる場合じゃないのよ！」

私は先生の頬を両手で引つ張り伸ばす

「はへ ひゃ ふあめてえ へえっ」

次に荷物をまとめるため平野と小室がいるところに向かう

ドカドカ

「高城さん？」

「平野っ」

「「ぶっばー」」

鼻血を出す2人

「し しずか先生？」

「あんたらは自分の仕事をしてなさい 絶対に必要なものだけ教え

て！」

「え あの そのロッカーにあるのとベットにあるのと銃はもちろん全部 でも何ですか？」

「こんな大騒ぎしといてここにいられるわけないじゃない！」

「逃げ出す準備よ！！！」

「あんたもいつでも動けるようにしておいて」

私は荷物をまとめに入る

荷物をまとめたあとそれを車に乗せるべく車へ向かう

「宮本 そこは毒島先輩に任せて手伝って！ 静香先生はもういいからとりあえず何か着て」

「あつ寒いと思ったら」

「で 車の準備！」

「今なら車に乗り込めるな 奴ら なら圭一君が引き寄せてたおしていった」

圭一の行ったほうを見たら100はいるであろう 奴らがいた。
「げっ どうするつもりよ？あれじゃバイクを使っても戻って来れないわ」

「なら……」

「迎えに行つてあげるしかないんじゃない？」

みんなの視線が静香先生に集まる

「うっあ あの先生変なこと言つた？車のキイはあるんだし」

「いいや 名案だ」

「てかそれしかないわ 決まりね！！圭一を助けた後川向こうに脱出！！ さ 準備して」

そして私たちは脱出のために準備を開始した。

【7人目】もう一人の・・・俺？（後書き）

圭一のターン!!

とうとうアニメに追いつかれてしまったOTL

ゆっくりやっています。

とうとう高周波ブレードが・・・そうそう、いまのイブ（圭一）格好はMGS4の雷電な感じですよ。

感想まっています!!

【8人目】B面・遭遇（前書き）

今回は、別の物語（B面）として主人公たちとはスタート地点が違うメイド隊のある者の物語です。時系列はイブと主人公達とで違った時からです

【8人目】B面・遭遇

私は これがただの悪夢であつて欲しいと思つた。でもそれが現実だつた

私は神崎家メイド隊の 警備部 に所属されています、姫守^{ひめもり} 心愛^{こいあ}です。

私は警備部に所属されてまだ一ヶ月、以前は食事部に所属していました。最初の実習として床主市の警察署へと手紙を渡すという任務をうけていました。でもそれが悪夢の始まりでした。

- 警察署 -

「到着ですね」

私は1人で、神崎家から陸上（国内）任務に支給される神崎家の紋章が入つたハマーに乗つて警察署へとやってきました。

私は、ハマーを警察署の地下・駐車場（来賓用）にため、鍵を掛け警察署の受付（一階）に行きます

ですが、階段を上り受付に来たら様子が変わりました。

（様子が変です・・・、電話が大量に鳴っているのに誰も出ないという人がいない）

そう、受付は電話が鳴っているのに人がいない。普通はいる筈なのに

『キヤ〜!!!』

（女性の悲鳴です！！一応、銃は握っておいたほうがいいでしょうか）

受付の奥のドアほうから女性の悲鳴が上がりました。悲鳴と同時に左の脇の下に掛かっている警備部の先輩にもらったUSPとナイフを構えながら、奥のドアに向かいました

（ん〜警察署で、銃を出すって何か罪悪感みたいなものが・・・）とのんきなことを考えながらも急ぎました

「うっ!？」

思わず声を出してしまった。

（電話に出なかつたんじゃない、出られなかつたんだ）

受付に入ると5、6人の警官だった死体と1人の一般人の死体があった。

（服ごと肉が食われてる・・・時間もたってる。でも、頭には銃弾があるけど真新しい）

今は詳しく調べてる時間もなく奥のドアに向かった。

ドアを開けるときは、ラス先輩に教えてもらった室内への突入方法で慎重に入っていた。

ドアノブ側の壁に背をつけ、ドアノブを回し一気に入った。

どうやらロッカー室のようだ。ロッカーが沢山ある、奥のほうからドンドンツツとロッカーを叩く音が聞こえた。

そっちのほうをこっそり覗いてみると、1つのロッカーに2人の男性職員がロッカーの扉を叩いている。中からは悲鳴というか泣き声が聞こえてきた。

(ロッカーの中から泣き声・・・どうやら受付の人たちを殺した犯人？ここで私取るべき反応は)

「その2人！何をやっているんですか！？手を上げてこちらへ向きなさい！！しなければ発砲します！！」

そう私が大きな声で警告した。男達は手は上げずこちらを向いた。私は男達の姿に驚愕した。

(腹部と肩から大量に出血してる・・・普通 失血してもおかしくない。こいつらは人間じゃない！)

右の方の男は腕を前に出し私に向かってきた

(化け物だ！！)

バンツ！

見事に心臓を撃ち抜いた。だがそれでも向かってくるのをやめない

(死まない・・・どうすればいい！？あつ)

私は、イブ様の言葉を思い出した

どんな敵でも、心臓がだめなら指令をだしている脳をやれ あきらめるな

バンツ！

今度は眉間にあたり相手は倒れ沈黙した。すかさず私は、左の男の眉間を撃った。

職員の沈黙と室内の安全を確認すると男達が叩いていたロッカーに近寄る。

「生きていますか？生きていたらノックを2回できるだけ静かに叩いてください。」

2回のノックが聞こえてきた。その後 ガチャっという鍵の開いた音がした。

「開けますよ」

そう断って、開けて中を見る

ロッカーには 恐怖のあまり失禁し、涙を流している、まだ若い女性職員がいました。

「お名前いいですか？私は姫守 心愛です。あなたは？」

泣きながらも答えてくれた。

「藍形 詩音 あいかた しおん です・・・」

この娘こそがココアのこの世界 悪夢 での相棒だった。

プロフィール（B面版その1）

名前【姫守 心愛】

年齢【14歳】

性別【女】

容姿【赤髪のショート、胸はCで全体に細い】

身長【157cm】

能力 射撃A

精密射撃B+

筋力B+

視力A

潜入・変装B

勘 S

洞察力A

趣味【料理】

在住先【日本 埼玉】

その他・備考

【8人目】B面・遭遇（後書き）

なんか新しい話をかいました。内容どうですか？ もし不人気のようでしたらやめますが・・それはおいておいて

長らく放置しててすみませんでした！！。今後も頑張って行きたいと思いますのでよろしくお願いします。

アニメ版終わっちゃいましたね、まあもう13話やるとしたら、漫画がもう2巻位出てからですかね

こっちもハイスピードでやると終わっちゃうので原作をA面として番外編（？）をB面にして長く続くようにしました。

感想どうぞしてくださいね〜

【9人目】B面 状況把握1

「ここは危なそうだから一旦そとにでよう？話はそれから聞くから」

「は、はい・・・」

私は、藍形さんをつれ ハマーの駐車場まで戻ることにした。

振り向くと

ゴトツ

何かが足に引っ掛かった、見てみるとリボルバーだった。

「これは、彼らが持っていたリボルバー・・・よし はいこれ」

私はリボルバーを手に取り彼女に渡した もう1人のリボルバーを手に取って弾を抜きそれも渡し、弾が空になったリボルバーを捨てた。

（合計10発・・・まあ大丈夫かな）

「え・・・？」

「護身用だよ」

「わ・・・わかりました」

彼女は銃を持つ事に抵抗があつたのかしぶしぶ受け取った

へっぴり腰の彼女をつれとりあえず受付に出た。

彼女の片手は私の野戦服（警備隊の制服）につかまってる、時折ぶ

るぶると震える手に脆さを感じる。

(怖かったのかな・まあ私は人のことを言えないけどね)

ドアから様子を見てみると受付には誰もいない。あるのは死体だけ。

先ほどまで五月蠅くなっていた電話のコール音も、ぱったりと止み
静寂が訪れていた。

(一体何が起こっているの?とりあえずハンマーに付いている無線で
連絡しなくちゃ)

とりあえず、何もなく受付にでれた

ピーピーッ!!

いきなり、死体の無線機が鳴った

拾ってスイッチを入れる

『こちら 交通課の鮫島だ!現在 民間人に襲われている!!あれ
は人じゃねえ!次々と増えやがる!!まるで映画のゾンビだ!!あ
あ!!人が噛まれたあ!!喰ってやがる!? 応援を頼む ぎゃあ
ああああ いてえ!いてえよおおお - ザアアアア - 』

2人は黙る

(ゾンビ?一刻も早く連絡を入れなきゃ・・・これで連絡入れられるかな?)

私は、周波数を合わせてみる

「な　なにやって　いるんですか?」

「屋敷と連絡を入れているんですよ」

「?」

ピピッ!!

無線が繋がった

「だれですか!?!この回線は神崎家の・・・」

メイド長の声だった

「メイド長!!私です!警備隊のココアです」

「ココアさんですか!?!良かった生きていましたか　大丈夫ですか?」

「大丈夫です。一体何が?」

「はい、どうやら生物災害　バイオハザード　が起こっているようです。感染すると映画のようなゾンビのような存在になるようです。感染経路は詳しくはわかりませんが、恐らくは血液感染かと・・・引つかかれたり、噛みつかれたりするとアウトです。そのため鼠算式に増えていきます。特徴は、痛覚視覚が低下するようで、そのかわり腕力が上がっているので捕まったら一般人ではほぼアウトです脳

を破壊するか神経をだめにさせるしか対策は無いようです』

『なるほど。大体は分かりました 私はどうすればいいですか？』

『屋敷のほうは周りが感染者だらけなのであなたのハンマーでは突破できません。なので回収地点を設けますそこから北へ124マイルほどいくと古い無人のヘリポートがあります。そこにヘリ1機をむかわせます。いつでも出るように準備しておきますので、近くにきたら連絡ください』

『了解です』

『コチラは気にせず 頑張ってください』

ブツッ

「聞いていましたね？」

「はい・・・」

「これであなたに話を聞く手間が省けました 楽しいドライブになればいいですけど まあとりあえずハンマーのある地下へ行きますか 着替えもあるのでそちらで着替えてください藍形さん」

彼女の失禁で汚れた衣服をみるココア。カーと恥ずかしそうに下を向く藍形さん

「は・・・はい それと詩音でいいですよ」

「では 私もココアで」

「よろしく！！」

お互いで腕を握り合った

とりあえず、途中に感染者がいたが迂回しながらも駐車場についた

ガシャンッ

と私は駐車場と1回へと繋がる階段のドアを閉める。

「これで とりあえず駐車場の安全は確保できたわね」

そうとりあえずだが外部の入り口のシャッターを閉め閉鎖的な空間を作った。そうブリーフィングと装備の再点検を行うためである。幸い来賓の駐車場はハマー以外の車はいなかったので簡単に出来た

ガチャ（鍵を開ける音）

「えつとねえ着替えて着替えつと」

ガサゴソ

「あつたあつた。まあこれでいいね」

「とりあえずコレを着替えてね詩音さん」

「・・・はい」

とりあえず、ハマーにつんであつたスニーカーキングスーツに2人で着替える。神崎家のハマーには一応2人分の最低限の装備をつんでいる。

「ピチピチしますね」

「なれば問題ないですよ はい 次はこれ」

ベストや銃 など身に着けるものを渡す。

（お姉さんなのに あうあうしてておもしろいわ）

ちよつとSつけのあるココアなのでした。

プロフィール（B面版その1）

名前【藍形 詩音】

年齢【22歳】

性別【女】

容姿【黒髪のロング、胸はDカップ ナイスバディ（笑）】

身長【160cm】

能力 射撃A

精密射撃B

筋力C

視力B+

潜入・変装B

勘 A

洞察力B+

趣味【読書】

在住先【日本 床主市】

その他・備考

【9人目】B面 状況把握1（後書き）

好評だったので 2連投稿やってみました どうですか？

【10人目】B面 状況把握2

私は私たちの装備を探すためにハマーの荷台を探ってる

「何つんでいましたっけ？まさかこんな事になるなんて ちゃんと先輩から説明されたことをメモとっていればよかつた」

後悔しながらも探す

ガサゴソガサゴソ・・・ゴソ ずるずるずる・・・

奥から大工道具入れみたいなゴツイでっかい箱を手前に寄せ

ガチャ・・・キイイ・・・

開ける。

中に入っていたのは、M4二丁・多数のM4の弾薬・大型ナイフ・ショットガン2丁・RPG71丁・ベレッタが2丁・9mm弾薬が多数入ってた。別な箱も荷台の奥から見つける、別の箱に入っていたのはスコップ類・光学機器類・爆薬・その他だった。

「これだけあれば大丈夫かな・・・ 詩音さん こっちにきて」

奥でなぜか体育座りをしている相方の詩音声をかける

「なんですか〜・・・なんなんですか！これは！？銃刀法違反で逮捕ですよ！！」

銃器を見るなり、今頃 まともな反応をする詩音さん・・・

「あれ？神崎家の者は特別に所持が許可されているんですよ？知りませんか？」

ハマーのドアの窓の下を叩くココア。そこには神崎家の紋章がある

「神崎家って世界三大家系の1つ『神崎』家ですかー！？」

「あ・・・多分その神崎家です まあとりあえずこれで納得ですね？」

「あ・・・はい」

「まあ 今の状況はわかっています 目的地も？」

「状況はわかってます 目的地はわかりません」

「目的地はここから北へ124マイルほどの古い無人のヘリポートです。そこからなら屋敷のほうからの迎えがいますので」

「わかりました、まずどうしたら いいですか？」

まごまご言う詩音さん

「着替えて貰いましたが 今は それだけでいいです。ハマーで向かいますよか じゃあ 車に乗ってください」

助手席のドアを開けて「どうぞ」という

「は はい」

ちゃんと座る。

「そうだ！ ある程度の武器はもってくださいね 運転してる間は片手しか開かないのでハンドガンくらいしか応戦できませんから」

「わかりました がんばります!!」
そっつい M4をもつ詩音。

「ではいきますよ! 詩音さん もう出入り口のシャッター壊して出ていいですよね? むこうに感染者がいると面倒なんで」

「あゝそうですね もう署内があれなので 壊しちゃってもいいんじゃないんでしょうか?」

「んゝじゃあちよつとまっつけてくださいね」

私は車を降り、シャッターに爆弾をしかけ 起爆スイッチを片手に
運転席に乗った

「ではいきますよゝ 詩音さん!!」
スイッチを入れる

「は はい!! 行きます! ココアさん」

アクセルを入れる

DOGAGAAAAAANN!!!!

私たちの生き残りを掛けた任務は開幕した

【10人目】 B面 状況把握2（後書き）

ちよつと短いですけど投稿です。

【11人目】 B面 調達1

警察署を出て、もう4・5km走っただろうか。そのくらい進んでまだ走っている。

ところどころ、感染者が群がったり車が衝突していて道を塞いだりして迂回してまだ2kmも進んでいないのかもしれない。

「ココアさん、おなか減りました」

なんと、のんきな声で飯を催促する詩音さん。

(詩音さんには緊迫感というのがないのでしょうか?)

「カロリーメイトが有ったはずでしたが」

「ココアさんが思いっきりカーブした時 落としてしまいましたよ」

涙を浮かべる詩音さん。自分は誤魔化す為に顔をそらす

「はいはい、私のあげますから許してください」

私はベストの中のカロリーメイトをだして後ろに乗っている彼女に手渡す。

なぜ助手席ではなく後ろの席なのかというと、後ろの席には、上から上半身を出すところがあるため詩音さんにはそこから、ある程度の感染者の排除をやってもらっているためである。

「それにしても、帰る前に医療道具と食料は手に入れときたいですね。屋敷にもある程度の貯蔵はありますが多いに越したことはないですからね」

内心、何もなしだと役立たずだなと思いながら考える私

「じゃあ、先に食料調達やりますか？ ほら、あそこにコンビニがありますよ」

右前方に指をさす詩音さん

「では 在庫のある倉庫目当てでいきますか・・・ 詩音さんはここで待機しててください」

私は車を、コンビニの自動ドアにぴったりとつけ、車が近づいたので開いた自動ドアに助手席のドアを引っ掛けとめる。そしてサプレッサーをつけたUSPを片手に助手席からでる。

(とりあえず 潜入できました・・・、散策しますか・・・)

とりあえず店内を見回って 人がいないか確かめる。見たところ店内には、感染者が3人いた。そのうちの2人はぶらーんとニートのように呆然と佇んでいる。こちらは頭を打ち抜いた。

もう1人は倉庫の出入り口のドアを叩いていた

(なにやってるんだろ あれ・・・とりあえずどかすか)

とりあえずヘッドショットをした。

とりあえずただの肉の塊となった死体をどけ ドアを開けようとする

ガシヤガシヤ・・・

(ん？鍵が掛かっている)

「だれかいるの？ 居るんだっいたらあけて」

「・・・」

ガシヤ

(開いた 入るか・・・)

ドアを開け入ろうとしたとき 突然わき腹に激痛が走り わき腹からは赤い液体が出てきた。

(包丁!?)

見てみると包丁が刺さっていた。

中を見ると若いヤンキーが居た

「なんだ、女かよ まあいいや やれるからな たっぷり可愛がってやるぜ ふひひひ」

私はその言葉を聴くなり 右手に持っていた、USPで頭を反射的に打ち抜こうと狙いを定める

「な やめてくれ!？」

銃を見るなり男の表情は急変し、命乞いを始めた。だが私はその言葉も聞こえていなく

パンツ

撃った。

(とりあえず、車に戻って止血しないと・・・)

私は、傷口を押さえながら助手席に戻った

「ど どうしたんですかココアさん！？その傷！！」
「不覚を取っちゃって 刺された。 詩音さん 後ろから医療パツクとってもらえます?。」

私は、とりあえず演習のときと同じ手順で適切に処置していった。

【11人目】B面 調達1（後書き）

さされちゃった・

「これで 大丈夫ですかね・・・」

とりあえず、安全になったコンビニ内でジャンプしたり多少動いたりした。

現時、コンビニは閉鎖的である。入口をハンマーで塞ぎ、裏口を塞いだからである。

「それにしても凄いですねえこの医療パック。結構大きい傷なのに塞がっちゃいましたね」

（神崎家で支給される医療パックは少しの銃創・切創なら直りますからね）

「とりあえず、ある程度、着ていたベストで軽減できたのでよかったですよ。内臓にも被害はないようですし」

刺された箇所をぼんぼんと叩く。

「だめですよ ココアさん！傷が広がりますよ!？」

「大丈夫ですよ、この程度なら。さて、治療がすんだので倉庫に行きますか そうそう、詩音さんは店内の食料をできるだけ車に積ん

「でございますね」

「無理はしないでくださいね」

そういった直後、詩音さんはレジに置いてあったダンボールに食べ物・飲み物を積んでいった。

また 襲われないように装備をさつさと着た。

（そうそう、刺されたことが班長に知られたら怒られますね・・・）
班長からこのことを知らなければいいなと願いながら着替えていた

- 移動中 -

「あちゃ〜、在庫が入っている箱が この男の血で真っ赤です（泣）」

先ほど正当防衛で殺した男は頭に真っ赤なお花が咲いております。

（あまり罪悪感が感じられませんが・・・、やはり感染者を殺してきたからでしょうかね。慣れないように気をつけましょう・・・）

とりあえず、空きのダンボールに腐らない食べ物類や飲み物を入れていきました。

詰め終わったダンボールを、車に乗せ終わります。

その直後、車内の無線に連絡が入りました。

メイド長からでした。内容は、国粋右翼団体「憂国一心会」の会長宅にイブ様が向かっていらっしやるので現地で落ち合えということでした。報告によるとイブ様と一緒に行動している方が複数いらっしゃるかとか。

「とりあえず、場所はわかっているので向かいますか」

「え？どこにですか？」

「走りながら話しますよ」

そうして私たちは、国粋右翼団体・会長宅に車を走らせた

【12 人目】B面 調達2 そして出発（後書き）

お久しぶりです。

テストやら、行事やらが多く 更新がなかなか出来ませんでした。
すいません。

これからもよろしくおねがいたします。

【13 人目】 幼女もとい少女救出

SIDE 圭一

現在、民家の敷地内にいる 敷地内にいる感染者を始末した 敷地内には俺と少女と犬の2人と1匹だ。そして敷地外には 正確に言えば玄関の柵の付近には感染者がうじゃうじゃといる。今は柵を極めて安全を確保しているがいつ突破されるか分からない状況だ。

「さて、どうするか・・・」

俺の手の中には幼女（？）もとい 少女が父の死を悲しんで泣いている子がいる。

慰めたが 流石に目の前で父が刺されて亡くなったのだ 無理もない。

「お姉さん・・・もう大丈夫」

まだ震えているが 泣くのを我慢している

(強い子だな・・・)

「そうか では脱出するぞ」

「でも お外にはいっぱいいるよ」

そう、今の問題はどうか戻れるかなのだ。 玄関が感染者で埋め尽くされて出口はない。

「うーん・・・」

考えうる全ての策を脳内に浮かべてみた

案1 とりあえず 少女と犬を抱え中央突破 危険が大きすぎる

案2 裏から出る 予測不能

案3 屋敷からUAV（無人航空機）をだしてミサイルで感染者を木っ端微塵 簡単

案4 少女と犬を抱え塀の上を歩く 面倒

「やっぱ3かな」

無線を屋敷に入れる。

『マスターどうしました？』

「UAVの支援砲撃を頼めるか？」

『はい 可能です。では至急向かわせます』

背後で連絡を入れてるような音がする。

（通信しながらだつてのに凄いな）

「助かる 砲撃場所は俺の現在地の近くの道だ。分かるな？」

『はい。マスターのGPSと最新の住宅地図と照合して随時場所を把握させていただいてます』

「流石だな」

『あいがとつございます。それとご報告があります』

「何だ？」

『はい 現在の屋敷の状況です。民間からの避難民が約200名ほど来ました。今はテントと毛布、食事を支給しています』

「そうか、できるだけのことをしてやれ」

『はい それと陸上自衛隊から連絡が入ってますが』

「なんと?」

『手を貸してくれだそうです』

「うちのものは派遣できないが、そっちが来るならかまわんと伝えておけ」

『了解しました』

「それと」

『それと?』

「一応、指揮下に入ってもらえ それが最低条件だと伝えておけ」

『マスターはお変わりませぬね クスクスクス・・・』

「笑うなよ、それと被害は?」

『感染者敷地内に入れるのは食い止めました。敷地の塀には高圧電流などエグイ罠が数々仕掛けられています。電力・水道などの設備はもともと町の一個分の設備なので問題ありません。敷地内のメイド隊全隊員負傷者はいませんが、約1名ほど屋敷の外にいます』

「無事か？」

『ええ、婦人警察官と行動しているようです。メイド隊員の名前は姫守 心愛と言います。連絡はついており、装備品もちゃんと持っていますので大丈夫だと思います。』

「そうか、では右翼の高城家で合流するように連絡してくれ」

『了解しました』

ハルの言葉とほぼ同時に空を飛行する轟音が鳴り響いた。

S I D E 沙耶

私たちは、先生の友達の車に必要なものをのせてイブ、今は圭一ばったかしら 圭一をあの 奴らの群れの中へ迎えに行こうとして 全員で車に乗り込んだ。

乗り込んだ瞬間 空に轟音が鳴り響いた。

「何よあれ！」

そう、でっかい飛行機が低空でとんでるのだ。

「あつあれは最新のPhantom Eye！ 見た事ない武装してる！！」

でぶちん（コータ）が目を輝かせながら飛行機をみている

「なによ それ？」

「新型の無人偵察機だよ 10日間も偵察できるんだよ！」

「なんでそんなものがここに？」

小室が言った。

「恐らく 圭一の仕業だろう」

あはははは・・・

皆が苦笑いをしながら顔を合わせる。

イブのいる方向から爆風と轟音が鳴り響く。

恐らく、ミサイルか何かだろう。煙が晴れるとソコには沢山いた筈の奴らが消えていて

1人の少女と1匹の1犬を抱えたイブの姿があった。

【13 人目】幼女もとい少女救出（後書き）

嗚呼、久しぶりです。

最近忙しいのですが休憩がてらに書けたので良かったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4249m/>

IF もし「自分の親が殺し屋でした。」が「学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD」

2011年10月6日17時14分発行